

第 25 期 細胞生物学分科会議事録 (第 2 回)

日時：2023 年 2 月 10 日 (金) 16:00～18:00

場所：zoom 会議

出席：小林委員 (委員長)、西原委員 (副委員長)、坂内委員 (幹事)、遠藤委員 (幹事)、大場委員、岡田委員、菊池委員、岸本委員、清川委員、糸委員、塩見委員、月田委員、東原委員、東山委員、渡辺委員

欠席：中野委員、吉森委員

未回答：米田委員

最初に小林委員長から、第 1 回の議論の確認および第 2 回までに進捗のあった事柄について報告があった。

議題：

1、J-stage との連携についての意見交換、意見の発出の可否について

我が国における論文出版数・発信力を含めた科学力の現状についての説明がなされた。

その後、以下のような意見が出された。

- 日本の発信力や雑誌のインパクトを高めるように予算を増額することが効果的ではないか
- 「インパクトファクターを上げる」ということに関して、現在は各学会が個々に取り組んでいる状況。そのような取り組みの情報共有を行う必要がある
- 科学力の向上に向けた取り組みを効率的に進めるための組織がなく、J-Stage がやるのか、JST に新たな部門を作るのかを含めて議論が必要であろう

これらの意見を踏まえ、J-Stage との連携・日本の発信力の向上に関しては、遺伝学分科会等と連携しつつ「報告」等の発信を可能性について検討する。今後、JST との意見交換会を検討する。

2、学術会議改革法案についての意見交換

令和 4 年 12 月 8 日に開催された「日本学術会議の在り方についての方針」について再考を求める声明が学術会議から出されたことに関連した意見交換がなされた。

- 任命拒否の段階よりも、政府／学術会議の議論がかみあっていない印象があり、建設的な対話をするべきである。この点については、1 月 30 日の学協会連合から声

明の最後にも追加されている。

- 一般の国民から見ても、どちらの主張が正しいのかがわかりにくい。
- 社会の変化と共に学術会議も変化するべきであろう。
- 学術会議としては、学術的に正しいか、歴史から見て正しいか、を意識して行動すればよいと考えている

今国会の動向を注視し、状況に応じて学協会から声明を発出するなどの必要性が確認された。

3、第13回形態科学シンポジウムについて

- 令和5年8月19日に名古屋市立大学を会場とし、生命科学研究に関心を持つ高校生に向けて公開シンポジウム「第13回形態科学シンポジウム」を開催する予定である（オンサイト主体だがオンラインでも開催）。研究者との交流会も含む。
- 現在、講演者を選考中であり（ほぼ内諾を得ている）、今後、幹事会に諮る予定である。
- 前回の公開シンポジウム（オンライン）では、全国から500名弱の高校生が参加した。今回（オンサイト）は100 - 200名の高校生の現地参加を見込んでいる。
- 高校生の質問（講演者への質問以外）に回答する先生は、必ずしも現地に行く必要はないと考えている。高校生の質問は多岐にわたる。

4、その他、細胞生物学生物学関連、日本の学術会全般の問題点などを広く意見交換

*オルトメトリクス スコアの活用について

- 未来構想（マスタープラン）に載せる提案書の評価は継続して行っている。
- 日本発の論文はオルトメトリクス（新聞記事、Twitter等での掲載を数値化することで、社会に対するインパクトを評価するための指標）が低いという問題意識が示された。これに対して、論文のインパクトというよりは、論文へのリンクが適切ではないために、十分引用されていないという指摘があり、生科連からは適切に引用してもらえるように案内していることが説明された。さらに、オープンアクセス問題もあり、doiを掲載しても新聞社の人を読めないかもしれず、そうした論文に対しては記事が書けないのではという意見や、SNSの運用を含め、雑誌や個人がオルトメトリクスを上げるための工夫が必要だろうと意見がだされた。

5、次回の予定

- 第三回の会議の開催は秋を予定している。